

年の始めに際して

所長 武藤 義一

1976年の新春を迎えて皆様にご挨拶申し上げます。

ここで生産技術研究所の昨年の主要な事がらをふりかえってみたいと思います。

まず第一にあげるのは「複合材料技術センター」が設置されたことであります。無機質や高分子や金属などの異質の素材を組合わせて、それぞれの単独で使用するときとは全く異なった性質の材料となることは皆様のよくご承知のことではありますが、それらのなかには大変に優れた性質を有するものもあって、このような複合材料は非常に注目を集めております。そうしてこのような複合材料を研究するためには化学や金属などの材料関係はもちろんのこと、強度や加工に関する広い範囲の研究者の協力がなければなりません。このような要求に応ずるために本所に複合材料技術センターが新設されたことは誠に有意義なことと喜んでおります。

わが国は高度成長時代から低成長時代に移行し、空前の不況で国の財政も極度に困難な時期に、このようなセンターが設置できましたのは、鈴木前所長や田中前事務部長をはじめ関係各位の熱烈な努力の賜であることは当然であります。しかしその背後には当研究所の研究者の皆様の実力が高く評価され、しかも学会会議などの熱心な御後援もあったことを考えますと、国家や国民の要請に応じて研究の実をあげるのに最適の研究所と認められたということですので、関係各位はもちろんすべての所員はこの負託にこたえるように今後より一層の御精進をお願いしたいと存じます。

次にあげられますのは千葉実験所に「構造物動的破壊実験室」の新営建物（810m²）が認められ、昨年度末に完成し、昭和50年5月16日に落成式を挙行することができたことであります。世界有数の地震国でありますわが国の地震についての関心が深いのは当然であり、国家としても各種の対策を講ずることが必要であります。そのために地震についての地球物理学的の研究を行い、地震予知についての研究をするために本学に地震研究所が置かれてありますことはよく知られているところであります。一時は大学紛争の渦中にまきこまれて大変な事態のときもありましたが、最近はずっかり収まり、昨年11月には創立50周年の式典も盛大に挙行されたことは喜ばしいことと存じております。

しかし、地震は予知だけ研究すれば良いというものでなく、建物の耐震性の研究も重要でありまして、考え方によってはこの方がより重要であるといつてよいかも知れません。幸に当研究所には耐震構造研究グループ（通称ERS）がありまして、岡本元所長（現埼玉大学長）の頃から既に世界的に有名な研究グループでありました。そうしてその研究のために、構造物動的破壊試験装置、応答発生装置、入出力データ処理装置などが設けられ、かなりの成果をあげておりましたが、電算機などを用いなければならぬにも拘らず、これらを収める実験棟がなくて、久しく不便をかこつておりました。それが東大本部や文部省のご好意で新営できることになりました。落成式にはこの方面の研究者が多数御来会いただきまして御激励下さるとともに、ただ単に生研の施設としてでなく、広く関係者の有力な研究施設としてお考えいただけるようで、これも喜ばしいことと存じました。

その他にも多くのことがありまして、かねて第2次計画まで完遂しました臨時事業につきましても第3次計画の「公害・災害からの都市機能の防護とその最適化に関する研究」の第2年次を遂行中でありまして、また「高分解能多次元画像情報処理装置」につきましても第2年次の予算が配当されて完成し世間の注目を浴びております。

また斎藤教授が発明について恩賜賞を受賞されたほか、多くの所員の方が受賞されるなどその業績が評価されていることも見逃がせないことです。

しかしこのような喜ばしいことだけでなく、昨年には 谷 元所長のご不幸や第3部の山上和七さんの御不幸にあいまして胸の痛むのを覚えました。所員の方のみでなくご関係の皆様におかれましては、一層御自愛のうえ研究を遂行して下さるようお願いしております。

年頭の言葉としてはとりとめのないことばかりを並べましたが、お屠蘇の肴にでもしていただければ幸いです。